

# 韓国人日本語学習者による 句末イントネーションの生成

—母語の影響の再検討と発話場面による  
影響に注目して

金 瑜眞

◆要旨

**本**稿の目的は、韓国人日本語学習者の句末イントネーションについて、イントネーション類型の再考を通して母語の影響を再検討することと、発話場面による句末イントネーションの出現の相違を明らかにすることである。本稿では、まず、従来の研究におけるイントネーションの3分類を見直して9分類とし、学習者の句末イントネーションを分析した。学習者の日本語と韓国語を対照した結果、上昇下降調「HL」や延伸が見られる下降調「長L」の出現数が韓国語より日本語で有意に多く、母語の影響だけでは説明できない結果が示された。さらに、発話場面による句末イントネーションの出現を分析した結果、学習者は異なる2つの発話場面にもかかわらず「HL」の出現数に有意差が見られず、発話場面を考慮していないイントネーションの使用傾向が見られた。

◆キーワード

句末イントネーション、韓国人日本語学習者、母語の転移、発話場面、非流暢性

◆ABSTRACT

This study analyzes Phrase final intonations produced by Korean learners of Japanese by reanalyzing intonation types and examining L1 influence as well as the differences in intonation attributed to conversation situation. Previous studies mention three types of intonations which were reanalyzed into nine types. Next, Korean learners' Japanese intonation was contrasted with their Korean intonation. The results show that "HL" intonations and "Long-L" intonations were more frequent in Japanese than Korean. This indicates that the phrase-final intonation of Korean Learners' cannot be explained by L1 influence alone. The results concerning differences attributed to conversation situation show that there was no significant difference observed in "HL" production in the two conversation situations. This suggests that Korean learners' "HL" production is not influenced by conversation situations.

◆KEY WORDS

Phrase final intonation, Korean learners of Japanese Language, L1 Influence, Conversation situation, Disfluencies

Production of Phrase Final Intonation  
by Korean Learners of Japanese  
Language  
Analyzing L1 influence and influence of the  
conversation situation

YUJIN KIM

## 1 研究の背景および目的

韓国人日本語学習者の発音には、句末を上昇または上昇下降させるイントネーションがよく見られる。これは、「失礼」な印象(李2004)や「押しつけがましき」(松崎2006)等の否定的評価を引き起こし、「発話者の能力や人格の評価にまで影を落としかねない」(土岐1989:113)重い誤りと言える。

一方、誤りの要因については、学習者の日本語と韓国語に出現する型が類似することから、母語の影響(李1999)が指摘されてきたが、その類型については再考の余地がある。李(1999)は、ピッチの上下変化により、上昇下降調、上昇調、長呼調<sup>[註1]</sup>の3分類を行うが、日本語の韻律ラベリング方式であるX-JToBI(五十嵐他2006)や韓国語のK-ToBI(Jun2000)では、上昇や下降だけでなく、ピッチ変化が生じるタイミングや上昇の仕方により上昇下降調や上昇調が細かく区別される。中間言語が母語と目標言語から影響を受けることを考慮すれば、既存の3分類では十分とは言えない。類型の再考を行った上で、学習者の母語と目標言語、さらに母語話者の日本語を対照することで、学習者の句末イントネーション生成における母語転移の再検討が可能になると考えられる。

もう一つの課題は、分析対象の発話データの性質が結果に影響を与えた可能性である。多くの先行研究は読み上げ音声をデータとするが(李1999, 崔2005)、イントネーションは発話意図を示す機能を持つことから、読み上げ音声より自発音声の方が、より多様な類型が出現する可能性がある。また、発話意図により出現するイントネーションに相違が見られるのは明らかである。幅広く特徴を捉えるには、発話場面の相違にも焦点を当てる必要がある。

そこで、本研究では、まず、韓国語と日本語の先行研究を参考に、韓国人日本語学習者の句末イントネーション類型の分類を見直す。その上で、発話場面の異なる2つの自発音声データを材料に、学習者の韓国語と日本語、母語話者の日本語に見られた句末イントネーションを対照し、母語の影響を再検討する。

本研究における句の定義を述べる。K-ToBIとX-JToBI<sup>[註2]</sup>はともに句末イントネーションがイントネーション句の終端に出現するとするが、日本語では「ピッチレンジがリセットされる」(五十嵐他2006:348)特徴があるのに対し、韓国

語ではリセットされてもイントネーション句と判定できないケースがある(Kong2010)。また、韓国語のイントネーション句はポーズが後続する(Jun1993)。本研究では言語間の対照を行うことから、日韓両言語で条件を満たすよう、ピッチレンジがリセットされ、さらにポーズが後続する句を分析対象とした。ポーズの認定は、X-JToBIを参照し200ms以上とした。なお、言いよどみや子音閉鎖区間等の単語内部の無音区間は、句境界と見なさない。また、特定のイントネーションと共に起しやすい終助詞や「です」「ます」の文末形式も分析から除外した。

## 2 方法

### 2.1 調査対象者

韓国人日本語学習者(以下KL)は韓国の大学で日本語を学習するソウル方言話者10名で、平均学習歴は2.4年(SD=0.52)である(日本滞在歴なし)。習得状況についてより詳細に知るため、東京方言話者(以下NS)10名にも協力を求めた。

### 2.2 発話データの収集

発話データの収集は、ロールプレイ形式で行い、発話相手と発話意図が異なる2つの場面を設定した。発話場面の差異を設けた理由は場面により学習者の母語で出現する類型が異なるためである。韓国語の句末イントネーションの出現について発話機能の面から分析したPark(2003)は、上昇下降調のLHLが親密な話者間で現れ、強調の意味を持つと指摘している。そこで本研究では、発話場面①(以下場面①)(図1)として、LHLが出現しやすい「ヘビースモーカーの友達にたばこをやめるように説得する」ロールプレイを設定した。

また、上昇調のHは「そして」の意味を持つ「-ko」(고)と共に起し、発話が継続することを示す(Park2003)。そこで、時系列で発話が進みHが出現しやすい「上司に出張の日程を報告する」発話場面②(以下場面②)(図2)を設けた。ロールプレイは1対1で行い、相手役は筆者が担当した。録音機材は、Zoom社のHandy Recorder H4nを使用し、wavファイル形式で録音した。ロールプレイの

開始部と終了部は、各発話場面の特徴が出ないため分析対象から除外した。



図1 場面①におけるロールカード

	一日目(9月20日 土曜日)	二日目(9月21日 日曜日)
あなたは 職場の上司と大阪へ1泊2日間出張に行くことになりました。出張の前、上司は出張の日程を立て、自分に報告するように言いました。 今日、あなたは、上司に自分が立てた出張のスケジュールについて報告します。次の日程表をもとに、大阪出張のスケジュールについて時系列で上司にプレゼンテーションをしてください。	9:00 仁川空港集合、飛行機チェックイン	9:00 ホテルロビー集合
	11:00 関西空港到着	9:30 大阪から新幹線で広島へ移動
	12:00 大阪心斎橋で昼食	11:00 取引先B社工場訪問、昼食
	14:00 ホテルへ移動、ウメダホテルチェックイン	15:00 広島から大阪へ移動
	16:00 取引先A社 訪問およびミーティング	16:00 取引先C社訪問およびミーティング
	20:00 A社 鈴木社長と夕食	19:00 関西空港へ移動
	21:00 ホテルへ戻る	21:00 仁川空港到着

図2 場面②におけるロールカード

## 2.3 句末イントネーションの判定と類型の再考

発話データは音響分析ソフト Praat で分析し、聴覚的判断とピッチ曲線の目視により判定を行った。判定は、韓国人学習者の句末イントネーションにおける類型について指摘した金 (2015) を参考に、李 (1999) を再考した9類型<sup>[註3]</sup> (図3~図11)<sup>[註4]</sup> に基づき行った。従来の分類との相違は大きく3点である。

まず、上昇下降調を二分した。K-ToBIには、急激な上昇下降が早く生じる「HL」(図3)と上昇のタイミングが遅れて生じた後下降する「LHL」(図4)が存在する。本研究の発話データでも「HL」「LHL」がともに出現したため、2分類とした。第二に、郡 (2003) とX-JToBIを参照し、上昇調を、持続時間とともに上昇が高くなる「疑問H」(図5) (郡 (2003) の疑問型上昇調)、上昇幅が大きくなり強さを伴いアクセント的上昇をする「強調H」<sup>[註5]</sup> (図6) (郡 (2003) の強調型上昇調)、上昇が遅れて生じる「LH」(図7) (X-JToBI) に分類した。また、「強調H」より急激に上昇するが「疑問」と聴覚的判断されない型が見られた。この類型はNSには比較的稀で、KLに多く出現するため「韓国H」(図8)と名付けた。第三に、自然下降調を類型として含め、「L」(図9)とした。「L」は、自然下降のみが生じている点でX-JToBIの「L」、郡 (2003) の「平調」に対応する。NSによく見られるため、類型全体の中で「L」が占める割合を把握することはKLの習得状況を知る上で重要である。また、下降とともに母音延伸が起き、音圧が減少する場合が見られたため、「長L」(図10)を類型として含めた。なおピッチ変化がなく平らに伸ばす長呼調 (李1999) は、類型名の統一を考慮してLowとHighの間の「M」とし、延伸を示す「長」を加え「長M」(図11)とした。

## 3 結果

### 3.1 判定の一致度検定と無作為抽出

句末イントネーションの判定は、筆者と音声学を専門とする日本語母語話者1名で行った。2名の判定結果の一致度を検討すべくカッパ係数を求めたところ、高い水準で一致したため ( $k=0.941, p<0.01$ )、筆者の判定を分析に採用した。ま

た、本研究では自発音声をデータとしたため、発話場面と言語により出現数が異なる<sup>[註6]</sup>。母集団の数が大きく異なる場合、有意差も出やすくなる可能性があることから、発話場面と言語における各190例を無作為抽出し、分析対象とした。本研究における統計処理は全てSPSS 24.0 for macを用いた。

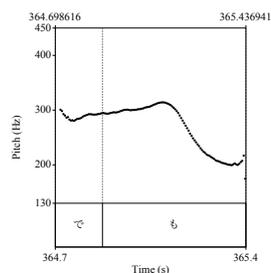


図3 「HL」

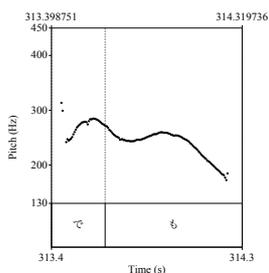


図4 「LHL」

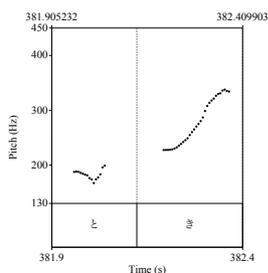


図5 「疑問H」

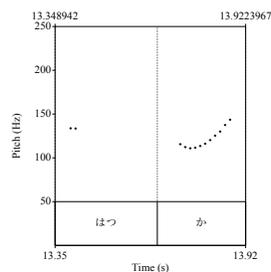


図6 「強調H」

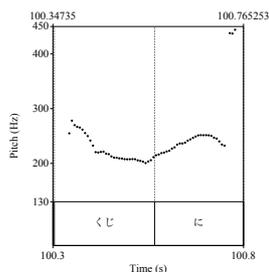


図7 「LH」

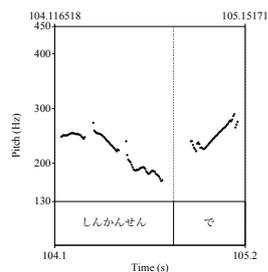


図8 「韓国H」

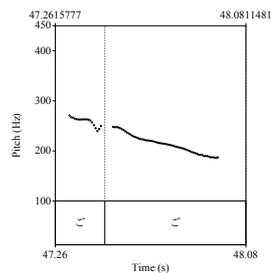


図9 「L」

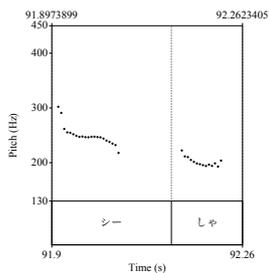


図10 「長L」

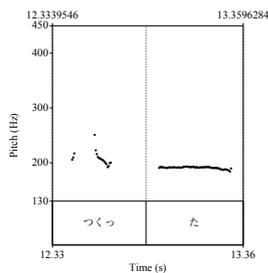


図11 「長M」

## 3.2 母語の影響

母語の影響が見られるか否かについて、KLの日本語と韓国語に対し $\chi^2$ 検定を行った結果、まず場面①の出現数に有意な偏りが見られた( $\chi^2(5)=112.72, p<.01$ )。そこで残差分析(表1<sup>[註7]</sup>)を実施した結果、日本語ではHLと長Lが有意に多く、韓国語ではLHLが有意に多かった。したがって、KLの母語である韓国語と目標言語の日本語間に相違があることが確認された。場面②も出現数に有意な偏りが見られた( $\chi^2(7)=74.93, p<.01$ )。残差分析(表2)を行ったところ、日本語ではHL、L、長L、長Mが有意に多く、韓国語では韓国H、LHLが多いことが示された。以上から、韓国語学習者の日本語に現れる句末イントネーションは韓国語に現れる類型と出現数に相違が見られることが示された。

表1 KLの日韓類型別出現数(場面①)

類型	日	韓
HL	67 △	41 ▽
L	59 △	38 ▽
長L	15 △	2 ▽
長M	12 △	3 ▽
強調H	8	6
韓国H	21 ▽	66 △
LHL	1 ▽	28 △
その他(疑問H, LH)	7	6
計	190	190

表2 KLの日韓類型別出現数(場面②)

類型	日	韓
HL	59 △	9 ▽
長L	24 △	6 ▽
L	65	55
長M	10	6
LHL	22 ▽	111 △
その他(疑問H, 韓国H)	10 △	3 ▽
計	190	190

## 3.3 日本語母語話者との相違

句末イントネーションの出現数がKLとNS間で相違が見られるか否かについて $\chi^2$ 検定を行った結果、場面①について出現数の偏りが有意であった( $\chi^2(6)=58.30, p<.01$ )。残差分析(表3)を行った結果、KLはLHL、長L、長Mをよく使用するが、NSはLをよく使用し、KLとNSで使用する類型に相違が見られた。一方、HLについてはKLとNSともにLに続き多く使用していたが、KLとNS間に有意な残差は見られなかった。場面②でも出現数の偏りは有意であった( $\chi^2(6)=162.46, p<.01$ )。残差分析(表4)を行った結果、KLはHL、韓国H、長L、長Mをよく使用するが、NSはLと強調Hを多用していた。したがって、KLの日本語

に現れる類型はNSとは異なることが示された。

表3 KL・NSの類型別出現数(場面①)

類型	KL	NS
LHL	22 △	0 ▽
長L	24 △	5 ▽
長M	10 △	3 ▽
HL	59	65
疑問H	8	9
L	65 ▽	106 △
その他(強調H,韓国H)	2	2
計	190	190

表4 KL・NSの類型別出現数(場面②)

類型	KL	NS
HL	67 △	23 ▽
韓国H	21 △	0 ▽
長L	15 △	0 ▽
長M	12 △	0 ▽
L	59 ▽	102 △
強調H	8 ▽	65 △
その他(LHL,疑問H,LH)	8 △	0 ▽
計	190	190

表5 KLの類型別出現数(日本語)

類型	場面①	場面②
LHL	22 △	1 ▽
L	65	59
HL	59	67
長L	24	15
長M	10	12
疑問H	8	5
韓国H	2 ▽	21 △
その他(強調H,LH)	0 ▽	10 △
計	190	190

表6 NSの類型別出現数(日本語)

類型	場面①	場面②
HL	65 △	23 ▽
L	106	102
強調H	2 ▽	65 △
その他(疑問H,長L,長M)	17 △	0 ▽
計	190	190

表7 KLの類型別出現数(韓国語)

類型	場面①	場面②
LHL	111 △	28 ▽
L	55 △	38 ▽
韓国H	3 ▽	66 △
HL	9 ▽	41 △
その他(疑問H,強調H,LH,長L,長M)	12	17
計	190	190

### 3.4 発話場面による影響

発話場面による影響を検討するため、場面①と場面②で $\chi^2$ 検定を行った。その結果、KLの日本語における出現数の偏りは有意であった( $\chi^2(7)=48.62, p<.01$ )。残差分析(表5)の結果、KLは場面①でLとHLを多用したが、場面による有意差は見られなかった。有意な残差が見られたのは、LHLが場面①で多用され、韓国Hが場面②で多用される点である。したがって、KLの日本語は、LHLと韓国Hにおいて発話場面による相違が見られることが示された。

一方、NSの出現数の偏りも有意であった( $\chi^2(3)=96.36, p<.01$ )。残差分析(表6)を行ったところ、NSは場面①場面②ともにLを多用するが、場面による有意差は見られなかった。有意な残差が見られたのは、HLが場面①でよく使用され、強調Hが場面②で多用される点である。したがって、NSは、HLと強調Hの使用において、発話場面による相違が見られることが示された。以上のことから、KLとNSともに、場面①と場面②間のイントネーションの出現傾向に相違が示されたが、その類型はKLとNSで異なることが示された。

他方、KLの韓国語にも発話場面の有意な偏りが見られた( $\chi^2(4)=131.53, p<.01$ )。残差分析の結果(表7)、場面①ではLHLとLが、場面②では韓国HとHLが多かった。したがって、KLは韓国語においても発話場面による類型の相違が確認され、さらに、場面①でLHLが、場面②で韓国Hが多いという結果は、KLの日本語の結果と一致した。

## 4 考察

本研究で得られた知見をまとめると、以下のようになる。まず、母語の影響は一律ではなく類型により異なる。KLのHLや長Lは、場面①②ともに、韓国語より日本語で多く、LHLは日本語より韓国語で多く現れた。この結果は、先行研究の、「有無やパターンは韓国語と日本語でほぼ一致」(李1999:72)とは異なっており、その要因として以下の3点が考えられる。

第一に、李(1999)の3分類を再考し、9分類による分析を行った結果、先行研究では一つの類型にまとめられ指摘されなかった類型の相違が浮き彫りとなり、学習者の韓国語と日本語が異なることが示されたと考える。

第二に、句末イントネーションを学習者が学習し使用している可能性が指摘できる。金(2013)は、句末イントネーションに対する韓国人学習者の内省についてインタビュー調査を行った結果、「日本語らしい特徴」とのコメントが得られたことを報告している。学習者がHLなどを日本語として能動的に使用した場合、韓国語より日本語で出現数が多い結果も説明できる。

第三に、HLや長Lが非流暢性と関わっている可能性が考えられる。特にHLは、フィラーや言いよどみのような非流暢性を示す要素との共起(柴田1977)が指摘されている。本研究の調査対象者にもフィラーや言いよどみが多数見られ(KL7場面①例:ですから(HL)、あなた一は(HL)、全部うーん(フィラー)、ぜんぶ(L)、ししまい(言いよどみ)、全部しま(言いよどみ)、約束を(HL))、「一文節ごとに区切って立て直し、たどたどしく話す学習者の発音の癖」(松崎2001:239)に伴うHLが出現したと考えられる。また、長Lは持続時間とともにピッチと音圧が減少する聴覚印象があり、目標言語における非流暢性が影響した可能性があると考えられる。句末イントネーションの対照を行った金(2015)は、長LがNSに見られる類型であるため、KLが長Lを学習し使用する可能性を指摘したが、本研究ではNSに長Lの出現数が少ないことから、金(2015)とは異なる結果が示された。

一方、韓国語より日本語で出現数が少なかったLHLは、NSには見られない類型であることから、KLが日本語のイントネーションを習得したことにより、使用しなかった可能性がある。また、たどたどしく話す学習者であるなら、目標言語で母語のように自身の感情や発話意図を示し、強調を意図するLHLを使用できなかったという可能性もある。したがって、日本語におけるLHLの出現にも目標言語の習得や非流暢性が関与している可能性があると考えられる。

次に、KLとNSを対照した結果を考察する。まず、KLは場面①②ともに長L、長MがNSより有意に多く現れた。長Lは上述の通り非流暢性が関わる可能性があるが、長Mも延伸を伴う点で非流暢性が関与していると推測できる。長Mのような平らな引き伸ばしは、上村(1989)が指摘するように、機能的にフィラーと類似し、NSも使用するものである。したがって、長MについてはKLが日本語のイントネーションを習得し使用している可能性もある。また、場面①②ともにKLはNSに比べLの出現数が少なかった。自然下降調のLが半数以上を占めるNSに対し、KLはLが占める割合が低い。この点においてKLにおけるLの習得はまだ十分であるとは言えない。

最後に、発話場面による影響について分析した結果を考察する。場面別に見ると、KLのLHLは場面①で場面②より有意に多く現れた。LHLは韓国語でも場面①で出現数が多く、説得的な発話場面で出現する傾向が確認された。ま

た、LHLはNSには1例も見られず、韓国語のK-ToBIを参考とし類型に含めたことから、母語の転移により生じる可能性が高いと言える。

一方、KLの韓国Hは場面②で場面①より有意に多く現れた。韓国Hは、韓国語でも場面②で出現数が多く、時系列に沿って日程を列挙しながら述べる場面②で出現する傾向が確認された。KLの日本語場面②における発話を確認したところ「関西空港で移動して」という発話の「で」や「て」で「韓国H」が出現し、また韓国語の同一の発話内容部分においても「韓国H」が見られた<sup>[注8]</sup>。韓国HはNSには殆ど見られず、Ahn(2010)が指摘するように、韓国語における上昇調は発話の継続や列挙を示す機能を持つことから、日程を時系列に沿って述べる場面②で母語の影響により出現数が多くなったと考えられる。

一方、NSは場面②で強調Hを多用していた。強調Hに限る特徴ではないが、日本語の句末イントネーションは「意味のくぎりであること、そしてまた発話が継続することを明示する」(郡2003:125)機能を持つ。したがって、韓国Hと強調Hは発話の継続を示す機能の面では共通する特徴を持っているが、韻律的特徴が日韓で異なる可能性がある。言い換えれば、場面②における韓国Hと強調Hの出現が目立つことは、KL・NSともに発話場面によりタイプの使い分けを行っていることを意味するが、そのタイプはKL・NS間で一致せず、KLの韓国Hは母語の影響である可能性が高いと考えられる。

さらに、KLのHLは、場面①ではKL・NS間に有意差が見られなかったが、場面②でKLがNSより有意にHLを多用していた。これは、NSが発話場面によりHLを使い分け、場面②では説得的場面である場面①に比べHLを使用しないためである。しかし、KLは場面①②におけるHLの使用に有意差がなく、発話場面による相違が見られない。したがって、HLにおいて、NSは発話場面を考慮した使用を行っているが、KLにこうした傾向は見られないと言える。

## 5 まとめ

本稿では、韓国人学習者の日本語句末イントネーションについて、母語の影響と発話場面による影響に焦点を当て検討を行った。その結果、先行研究の指摘の通り母語の影響だと考えられる結果もあったが、母語と比較した場合、句

末イントネーションの出現数に相違が見られ、母語の影響だけでは説明できない結果が示された。本研究の調査結果をまとめると、以下の通りである。

第一に、KLのHL、長Lは韓国語に比べ出現数が多く、母語と日本語の句末イントネーションが一致した先行研究と異なる結果が示された。異なる結果が得られた理由としては、類型の再考を行ったことや目標言語の習得、非流暢性などが影響したと考えられる。第二に、今回の調査結果を見る限り、KLは自然下降調Lの習得がまだ十分とは言えない。場面①②ともにNSに比べLの出現数が少なく、自然なイントネーションとしてLを使用できていない。第三に、KLのLHLと韓国Hは、発話場面による出現数に相違が見られ、KLは場面による類型の使い分けを行っていた。しかし、使い分けを行っている類型はNSとは異なり、母語の影響の可能性が高い。さらに、KLは場面①②ともにHLを多用したが、NSは場面②ではHLをあまり使用しない。このように、KLは場面による類型の出現傾向がNSと異なり、発話場面を考慮した句末イントネーションの習得は、まだ不十分だと言える。

以上の結果をまとめると、本研究で明らかになった最も重要な点は、イントネーションの類型により出現の理由が異なる可能性があることである。本研究では、類型の再考を行ったことから「「上昇下降調」が多く見られた」(李1999: 74)とした李(1999)とは異なり、学習者の句末イントネーションは多様であることが示された。さらに、句末イントネーションの出現の要因は、母語転移の度合いとも関わる部分があると考えられる。LHLや韓国Hのような母語転移が強いと思われる類型がある一方、HLや長Lのように目標言語の習得や非流暢性が関与している可能性がある類型もある。以上の結果は、教師が指導を行う際、学習者の発音に対し母語の影響と断定せず、類型により指導の方針を考える判断材料になり得る。また、イントネーションの発音練習だけではなく、発話場面による適切な使用を促す指導が求められる。

なお、本研究ではロールプレイの発話データを使用し新たな知見を得ることができたが、自発音声であることから分析対象を制限する必要があった。そのため、対象者別に統計処理を行う上で十分な数が得られず、KL・NS各10名分のデータを合算し統計処理を行った。付録1～6に示した調査対象者別の類型別数と平均および標準偏差を見ると、対象者別の類型の総数が異なるため一概

には言えないが、KLのHL、LHL、Lの標準偏差が大きいことから、結果に個人差すなわち習得の度合いによる差異が見られた可能性もある。今後はデータの数を増やし本研究で得られた知見を再検証する必要がある。

さらに、本研究のKLは非流暢性に関わる要素が見られたことから、上級であるとは判断しにくく、初・中級程度のレベルであると考えられる。今後、習得がさらに進んだ上級学習者と初・中級学習者を比べることで、句末イントネーションの習得過程を明らかにし、各類型の出現傾向がどのように変容していくのかを明らかにしていくことも意義があると考えられる。特に、HLについては、学習により能動的に使用する可能性と非流暢性により出現する可能性があることが示唆されたが、今回の調査対象者がどちらの要因に強く影響を受けたかは明らかにできなかった。習得レベルの異なる学習者にさらに追試を行うことで、HLの出現理由について続けてその実態を解明していく必要があるだろう。

〈筑波大学大学院生〉

## 【付録】 調査対象者別の類型別数と平均 (M) および標準偏差 (SD)

付録1 KL場面①日本語

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	M	SD
HL	46	31	7	19	29	29	38	43	3	35	28.00	14.36
LHL	1	12	6	1	30	1	31	5	27	21	13.50	12.55
疑問H	0	2	3	1	9	10	2	4	0	5	3.60	3.50
強調H	1	3	0	0	1	5	1	0	0	0	1.10	1.66
LH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
韓国H	0	0	0	0	7	7	1	1	0	0	1.60	2.88
L	29	62	28	23	56	46	32	38	26	18	35.80	14.54
長L	20	11	11	23	6	6	29	15	7	7	13.50	8.06
長M	4	3	0	2	9	5	1	3	0	4	3.10	2.69
合計	101	124	55	69	147	109	135	109	63	90	100.20	30.96

付録2 KL場面①韓国語

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	M	SD
HL	0	3	0	1	6	1	1	0	0	2	1.40	1.90
LHL	32	37	16	9	29	22	26	9	20	17	21.70	9.38
疑問H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
強調H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
LH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
韓国H	0	5	1	0	0	0	0	0	0	1	0.70	1.57
L	3	19	9	1	6	28	4	8	25	4	10.70	9.71
長L	3	1	0	2	0	0	2	0	0	0	0.80	1.14
長M	0	1	1	0	3	1	0	1	1	0	0.80	0.92
合計	38	66	27	13	44	52	33	18	46	24	36.10	16.37

付録3 KL場面②日本語

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	M	SD
HL	33	24	6	20	18	13	11	31	22	29	20.70	8.92
LHL	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0.10	0.32
疑問H	0	5	0	0	3	3	0	1	0	3	1.50	1.84
強調H	0	5	0	0	7	8	3	0	3	0	2.60	3.13
LH	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0.20	0.63
韓国H	0	9	3	1	18	13	15	8	7	4	7.80	6.05
L	16	32	7	15	10	18	28	37	9	5	17.70	11.08
長L	5	1	7	3	2	2	5	3	0	6	3.40	2.27
長M	1	1	7	0	5	4	0	2	1	3	2.40	2.32
合計	55	78	30	39	65	61	62	82	42	50	56.40	16.66

付録4 KL場面②韓国語

類型	KL1	KL2	KL3	KL4	KL5	KL6	KL7	KL8	KL9	KL10	M	SD
HL	1	3	5	2	5	4	1	4	5	12	4.20	3.16
LHL	10	5	0	0	2	5	3	0	2	1	2.80	3.16
疑問H	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0.10	0.32
強調H	1	1	0	0	5	0	0	0	0	0	0.70	1.57
LH	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0.40	1.26
韓国H	0	8	8	4	19	3	5	10	3	6	6.60	5.25
L	0	9	5	3	0	7	3	6	3	2	3.80	2.94
長L	1	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0.20	0.42
長M	0	0	1	1	0	0	0	0	1	0	0.30	0.48
合計	13	26	19	10	31	20	13	20	18	21	19.10	6.26

付録5 NS場面①日本語

類型	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	M	SD
HL	30	17	17	25	17	19	22	23	16	30	21.60	5.34
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
疑問H	2	1	0	3	1	6	3	0	1	1	1.80	1.81
強調H	0	1	2	1	0	2	1	0	0	0	0.70	0.82
LH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
韓国H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
L	24	45	29	24	19	24	39	30	23	67	32.40	14.52
長L	0	3	0	2	2	0	0	0	2	1	1.00	1.15
長M	1	2	2	1	4	1	0	0	1	7	1.90	2.13
合計	57	69	50	56	43	52	65	53	43	106	59.40	18.36

付録6 NS場面②日本語

類型	NS1	NS2	NS3	NS4	NS5	NS6	NS7	NS8	NS9	NS10	M	SD
HL	2	0	1	1	1	1	6	17	3	10	4.20	5.43
LHL	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
疑問H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
強調H	16	14	4	10	7	11	18	16	8	21	12.50	5.38
LH	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
韓国H	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
L	13	40	36	18	4	21	23	29	14	26	22.40	10.91
長L	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0.10	0.32
長M	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0.00	0.00
合計	31	54	41	29	12	33	47	62	25	58	39.20	16.01

注

- [注1] …… 李 (1999: 77) は長呼調について「ピッチの上下変化がなく、平らに延ばすもの」と定義している。
- [注2] …… XJToBIでは上昇下降調や上昇調はイントネーション句の特徴だが、下降調「L%」はイントネーション句の下位の「アクセント句の終端に所属する」(五十嵐他 2006: 348) としている。しかし、下降調は母語話者に典型的な類型であり、学習者のイントネーション習得の現状を知る上で重要な指標であることから、本稿では下降調「L%」も分析対象とした。なお「%」はToBIの句末イントネーションを示す記号だが、本稿では紙幅の都合により省略する。
- [注3] …… 類型の名称におけるHはHigh、LはLow、MはMidの略である。Mの定義は研究により相違があるが、本稿ではピッチの変化が見られない場合を示す。なお、金 (2015) ではLを「自然下降調」、長Lを「急な下降調」、長Mを「平らな延ばし音調」としたが、本研究では名称の統一のためLとMで表記した。また、金 (2015) は「急な下降調」について「著しい急な下降とともに、強さの減少や母音の延伸」(金 2015: 43) を特徴としているが、本研究の発話データでは急な下降が見られる例があまり現れなかったため、ピッチの下降、母音延伸、音圧の減少があれば、急な下降でない場合も長Lに分類した。
- [注4] …… 図3～図11のピッチ曲線は本研究で収集したKLの発話データから抽出した。各類型は図の中央線以降の部分に該当する。また本研究では、ToBI以外の文献を含め類型の再考を行ったため、ToBIのラベリング法による分節音などのラベリングは省略し、ピッチ曲線と該当部分の発話内容を簡単に示した。
- [注5] …… 文節末において発話の継続を示す、強さを伴わないアクセントの上昇も、強調のニュアンスは持たないが強調Hに分類した。
- [注6] …… 日本語場面①出現数KL: 1002、NS: 594、日本語場面②出現数KL: 564、NS: 392、韓国語場面①出現数KL: 361、韓国語場面②出現数KL: 191
- [注7] …… 表1には、各類型の出現度数を示した。△は残差分析の結果、有意水準 $p < .05$  レベルで期待値より有意に大きいもの、▽は有意に小さいものである。 $\chi^2$  検定において期待度数が5以下のセルは「小度数のセルどうしを併合する、または「その他」というカテゴリーを作る」(田中・山際 2003: 265) ことで、 $\chi^2$  検定の制約を回避することが可能になる。そこで本研究では、期待度数が5以下のセルを統合し、「その他」とした上で再度 $\chi^2$  検定を行った。「その他」については有意な残差が見られた場合であっても、どの類型における有意差であるかを明らかにすることが困難であるため、結果や考察の検討に含めない。「その他」に含まれず各表に記載のない類型は1例も現れなかった類型である。
- [注8] …… KL4名にこの傾向が見られた (KL3:「関西空港で移動して (韓国H)」KL5:「関西空港で移動して (韓国H)」KL7:「関西空港で (韓国H)」KL8:「関西空港まで移動して (韓国H)」)。4名中3名は韓国語でも韓国Hが見られた (KL3:「칸사이공항을 이동한다음에 (韓国H)」(関西空港を移動した後に)KL5:「칸

사이공항으로이동을하여 (韓国H) (関西空港へ移動し) KL8:「칸 사이공항으로이동한뒤에 (韓国H) (関西空港へ移動した後に) 拙訳)。

## 参考文献

- 李惠蓮 (1999) 「韓国人日本語学習者の日本語発話の“end focus”における母語の影響—句末を中心に」『日本語教育』103, pp.69–78. 日本語教育学会
- 李惠蓮 (2004) 「ソウル方言話者の日本語発話に対する日本語母語話者の評価—“end focus”を中心に」『日語日文学研究』48, pp.1–20. 韓国日語日文学會
- 五十嵐陽介・菊池英明・前川喜久雄 (2006) 「第7章 韻律情報」『日本語話し言葉コーパスの構築法』国立国語研究所報告No.124, pp.347–454. 国立国語研究所
- 上村幸雄 (1989) 「日本語のイントネーション」『ことばの科学』3, pp.193–220. むぎ書房
- 金瑜眞 (2013) 「日本語句末イントネーション習得における韓国人学習者の内省」『2013年冬季学術大会発表論文集』 pp.393–402. 韓国日語日文学會
- 金瑜眞 (2015) 「日本語学習者のイントネーション研究の展望—韓国語と日本語の句末境界音調に注目して」『筑波応用言語学研究』22, pp.38–51. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻応用言語学領域
- 郡史郎 (2003) 「イントネーション」『朝倉日本語講座3 音声音韻』 pp.109–131. 朝倉書店
- 柴田武 (1977) 「現代イントネーション」『言語生活』304, p.16. 筑摩書房
- 田中敏・山際勇一郎 (2003) 『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法—方法の理解から論文の書き方まで』教育出版
- 崔泰根 (2005) 「韓国人日本語学習者の日本語音声に見られる「韓国語的イントネーション」について—「フレーズ末昇降調」と「発話リズム」による母語干渉を中心に」『第19回日本音声学会全国大会予稿集』 pp.25–30. 日本音声学会
- 土岐哲 (1989) 「音声の指導」『講座日本語と日本語教育』13, pp.111–138. 明治書院
- 松崎寛 (2001) 「日本語の音声教育」城生伯太郎 (編) 『日本語教育学シリーズ コンピュータ音声学』3, pp.207–258. おうふう
- 松崎寛 (2006) 「第1節 音声・音韻」『講座・日本語教育学』6, pp.2–16. スリーエーネットワーク
- Ahn, Byoung-Sub (2010) 『한국어 운율과 음운론 (韓国語韻律と音韻論)』図書出版ウォールイン
- Jun, Sun-Ah (1993) *The phonetics and phonology of Korean prosody*. Ph.D. dissertation. The Ohio State University, Columbus, Ohio, USA.
- Jun, Sun-Ah (2000) K-ToBI (KOREAN ToBI) labelling conventions. *UCLA working papers in phonetics*, 99, pp.149–173.
- Kong, Eun-Jong (2010) The Role of Pitch Range Reset in Korean Sentence Processing. *Phonetics and Speech Sciences*, 2(1), pp.33–39.
- Park, Mee-Jeong (2003) *The Meaning of Korean Prosodic Boundary Tones*. Ph.D. dissertation. Los Angeles: University of California.